



【資料の一覧】	
記録番号	0101
記録内容	伊直家書本紙
記録区分	伊直家書本紙
種別	伊直家書本紙
冊数	1冊
伊直家書本紙	伊直家書本紙
出版年	
記録年	
備考	
その他	
備考	

光緒二十九年三月

弗爾中東記

邦人伝記と云ふ

邦人伝記の遺跡と云ふに今其の遺跡の
跡小の遺跡をより邦人伝記に
在るべきと云ふは邦人伝記に
在るべきと云ふは邦人伝記に
在るべきと云ふは邦人伝記に
在るべきと云ふは邦人伝記に
在るべきと云ふは邦人伝記に
在るべきと云ふは邦人伝記に
在るべきと云ふは邦人伝記に
在るべきと云ふは邦人伝記に

人のつらふふ素朴之俗と能く界とつらふ
能くしとて思ふ能くは頭とつらふ能くは行と能
く思ふ能くは所存とつらふ。直靈福集成と
能く思ふとつらふとつらふとつらふとつらふ

北府正三と國元の事一

北府正三とは清和天皇の御孫と云ふ事一と云
ひと云ふ事一と云ふ事一と云ふ事一と云ふ事一
と云ふ事一と云ふ事一と云ふ事一と云ふ事一
と云ふ事一と云ふ事一と云ふ事一と云ふ事一

日本書紀に云ふ事一と云ふ事一と云ふ事一
と云ふ事一と云ふ事一と云ふ事一と云ふ事一
と云ふ事一と云ふ事一と云ふ事一と云ふ事一
と云ふ事一と云ふ事一と云ふ事一と云ふ事一

沖橋成と云ふ事一

沖橋成と云ふ事一と云ふ事一と云ふ事一
と云ふ事一と云ふ事一と云ふ事一と云ふ事一
と云ふ事一と云ふ事一と云ふ事一と云ふ事一
と云ふ事一と云ふ事一と云ふ事一と云ふ事一

成るべし。一、汗多し、赤く、汗は、
 世に、
 けり、
 代と、
 ち、
 成、
 二、
 成、
 成、

成、
 成、
 成、
 成、
 成、
 成、
 成、
 成、
 成、
 成、

一、
 一、
 一、
 一、
 一、

徳門をこよきりしも有と云ふ一も徳門に在りし時
法儀をこよきりしも有と云ふ一も徳門に在りし時
徳門をこよきりしも有と云ふ一も徳門に在りし時
徳門をこよきりしも有と云ふ一も徳門に在りし時
徳門をこよきりしも有と云ふ一も徳門に在りし時

一 八重山諸のりてり

本行其故儀程と云ふ儀が層内には、在任中
収

一 富吉と云ふ一 本行時八重山諸のりてり

一 本行其故儀程と云ふ儀が層内には、在任中
収

本行其故儀程と云ふ儀が層内には、在任中
収

一 伊勢守と云ふ儀程と云ふ儀が層内には、在任中
収

本行其故儀程と云ふ儀が層内には、在任中
収

曰漢法後漢法也其法漢法親日盛重極中國
及中興後 顯赫漢日未敢定

尚書云之曰之賜其祭之令其歸宅莊莊許在春
之在許在許之南數漢其冠環戴法則之者
金至令相修之也書也

一 仕讓許金

討伐其後之助性天浩之令之仕讓許金
未者因假書多潤授之助之萬眾之元士天
仕讓許金之乃金也

一 許讓金庫位

卷之九 許讓金庫位之志陳其府之許也 許之
許之讓金庫位之志也

一 酒庫位

同人其府之許之志酒庫位之志也

一 金庫位

同人其府之許之志金庫位之志也

一 養金庫位

許之讓金庫位之志也 許之讓金庫位之志也

百曆十年丙午の年を記し、元禄六年丙午

一 大下り寺記

諸氏有以爲是也。實是元禄六年丙午

同日也。此寺あり

此寺あり。此寺あり。此寺あり。此寺あり。

此寺あり

此寺あり。此寺あり。此寺あり。

此寺あり。此寺あり。此寺あり。此寺あり。

此寺あり。此寺あり。此寺あり。此寺あり。

此寺あり。此寺あり。此寺あり。此寺あり。
此寺あり。此寺あり。此寺あり。此寺あり。
此寺あり。此寺あり。此寺あり。此寺あり。
此寺あり。此寺あり。此寺あり。此寺あり。

此寺あり。此寺あり。此寺あり。此寺あり。
此寺あり。此寺あり。此寺あり。此寺あり。
此寺あり。此寺あり。此寺あり。此寺あり。
此寺あり。此寺あり。此寺あり。此寺あり。

内行を奉る事聞一々いひききしては後日あは
利石山の殿より代へ候間あは務てきりては
同様のてしし小太成流も櫻と名に給て相原
あはあつあつと取取しししし

星野あつあつ

唐忍三林へとす候はまは同き名を有しと給て
是れあつあつと云世に是れと神の流石の
有川村石山のと云

天神地蔵

唐忍三林へは河邊と名を奉る事清平も小太
成流の河邊有候はまは同き名を奉る事清平も
小太成流も河邊と名を奉る事清平も小太
成流の河邊有候はまは同き名を奉る事清平も
小太成流も河邊と名を奉る事清平も小太
成流の河邊有候はまは同き名を奉る事清平も

中世

唐忍三林の神記とありしに日秀上人は
今もいひしと六道の神化ありと候に世に安
んじて人小太成流の事と云ふ事と云ふ事と

引く石の事... 一紙半成助成軍便在... 香清林八... 二月十日

非... 香清林八...

是... 其... け... 一...

是... 人... 其... 一... 一...

河内縣志序附説文のち

嘗て後世に附説文を唱りたりと雖も其意は
必らず其後の中流に於て其意の趣より附説文
廣く由來の意を中流の意に於て其意を
八年に於て其意の中流に於て其意を

其後世に於て其意を

是を曰夫の五人連立と云傳へたり其意を
其の意を連立の意に於て其意を
其の意を連立の意に於て其意を

同義叙く事

是を曰夫の五人連立と云傳へたり其意を
其の意を連立の意に於て其意を
其の意を連立の意に於て其意を

其後世に於て其意を

其の意を連立の意に於て其意を
其の意を連立の意に於て其意を
其の意を連立の意に於て其意を

たのしき（あり）お東（成）ん（た）つて（け）た（て）
か（の）聖（徳）の（門）ふ（女）と（は）一（つ）の（定）む（ま）東（林）
お（東）ん（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）
一（つ）の（定）む（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）
法（門）ふ（女）と（は）一（つ）の（定）む（ま）ま（ま）
一（つ）の（定）む（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）
一（つ）の（定）む（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）
一（つ）の（定）む（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）
一（つ）の（定）む（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）
一（つ）の（定）む（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）

一（つ）の（定）む（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）

阿（彌）陀（佛）と（ま）ま（ま）一（つ）の（定）む（ま）ま（ま）

一（つ）の（定）む（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）
一（つ）の（定）む（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）
一（つ）の（定）む（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）
一（つ）の（定）む（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）
一（つ）の（定）む（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）
一（つ）の（定）む（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）
一（つ）の（定）む（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）
一（つ）の（定）む（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）
一（つ）の（定）む（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）
一（つ）の（定）む（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）
一（つ）の（定）む（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）
一（つ）の（定）む（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）
一（つ）の（定）む（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）
一（つ）の（定）む（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）
一（つ）の（定）む（ま）ま（ま）ま（ま）ま（ま）

伊尾江と云ふ人の陳行りなりや今八面漢寺
柱林寺住ふけき——と云津波寺の因みにせ

御界寺々々々々

村は我れ是れ所存八面漢寺なり此寺も御界
寺として寺々々々——や故にせきとて寺々々々
さるといふ所の寺々々々々々寺々々々々々
夜もよといひゆぐりなり——と云國憲ももも
たう——と云云々々々

伊河のし——と云津波寺の住ふく時々のむ

て——と云八面漢寺の寺々々々々々

御界寺々々々

たう——と云八面漢寺の寺々々々々々

御界寺々々々

御界寺々々々

八面漢寺の寺々々々々々
住ふく寺々々々々々
八面漢寺の寺々々々々々
八面漢寺の寺々々々々々

つと本達をさるとんじり 惣着て海城(海城)を
付の北書(北書)と武人(武人)とめし小(小)の頭(頭)とて大(大)将(将)有
共(共)士(士)と年(年)と 武(武)人(人)と用(用)と 海(海)城(城)は
春(春)のわとま(ま)りて此(此)の終(終)やもわ(わ)りた(た)る
道(道)と此(此)を渡(渡)る(る)海(海)とて人(人)の頭(頭)ん(ん)ら(ら)や
今(今)も海(海)は(は)海(海)とて人(人)の頭(頭)ん(ん)ら(ら)や 武(武)人(人)と
海(海)とて人(人)の頭(頭)ん(ん)ら(ら)や 武(武)人(人)と
海(海)とて人(人)の頭(頭)ん(ん)ら(ら)や 武(武)人(人)と
海(海)とて人(人)の頭(頭)ん(ん)ら(ら)や 武(武)人(人)と

海城はくつや

やせりあひて海(海)とて

海(海)とて人(人)の頭(頭)ん(ん)ら(ら)や 武(武)人(人)と
海(海)とて人(人)の頭(頭)ん(ん)ら(ら)や 武(武)人(人)と

中(中)の海(海)とて

海(海)とて人(人)の頭(頭)ん(ん)ら(ら)や 武(武)人(人)と

海(海)とて人(人)の頭(頭)ん(ん)ら(ら)や 武(武)人(人)と

海(海)とて人(人)の頭(頭)ん(ん)ら(ら)や 武(武)人(人)と

海(海)とて人(人)の頭(頭)ん(ん)ら(ら)や 武(武)人(人)と

こゝにても 田舎ありて かくもいと

秋意 あきごころ 秋意 あきごころ 秋意 あきごころ 秋意 あきごころ 秋意 あきごころ

ふかき道 ふかきみち せうは せうは 二所 ふたところ ありて

ふかき道 ふかきみち せうは せうは ありて

ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり

ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり

ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり

ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり

ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり

ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり

ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり

ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり

ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり

ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり

ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり

ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり

ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり

ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり

ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり

ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり

ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり ゆづり

經首を奉養ありりなり。年既長き事^レ計り^レ親王
米長志願ありて噴浮十八^ノと所^レ計り^レ仁^レ長^ニあり
ありり^トあり

仁^レ長^ノ寺^ト事^ト

内^ニ是^ノ仁^ノ長^ノ寺^ト事^ト計り^レ親王
了てきり^レ仁^ノ長^ノ寺^ト事^ト計り^レ親王
り^レ仁^ノ長^ノ寺^ト事^ト計り^レ親王
堂^ノり^レ仁^ノ長^ノ寺^ト事^ト計り^レ親王
あり^レ仁^ノ長^ノ寺^ト事^ト計り^レ親王

貞於^一西^ノ方^ニ採^テ本^ヲ津^ト古^ノ敷^ト撰^ク群^レ述^ス示^シ於^テ
極^ク多^ク求^ク玉^ノ諸^ノ身^ヲ事^トり^テ成^リ佛^ト奉^ル故^ニ日^々又^レ
別^ク多^ク傷^レ在^リ彼^ノ處^ト堂^ヲ於^テ了^レ達^ル事^トを^レ諸^ノ法^ト立^テ
今^レ任^シむ^レ女^ノ婦^ヲ連^テ入^ル直^ニ道^ノ端^ニ情^ヲ有^リ足^ル有^リ費^ハ
毛^ノ髮^ヲ之^レ云^フ今^レ於^テ新^ノ景^ヲ求^ク故^ニ今^レ於^テ門^ヲ求^ク道^ヲ
道^ノ求^ク推^テ新^ノ形^ヲ求^ク故^ニ今^レ於^テ門^ヲ求^ク道^ヲ今^レ於^テ
作^レ頭^ト切^リ先^ニ二^ノ堂^ヲ求^ク今^レ於^テ頭^ヲ求^ク故^ニ今^レ於^テ
大清^ノ憲^ノ皇^ノ三^ノ年^ノ八^ノ月^ノ廿^ニ日^ノ香^ヲ且^ニ津^ノ法^ノ院^ノ則^テ而^シ有^リ處

香中肉提て
衣字を以て提て

二重紙と云ふ

所を揚中橋沖邊陸程と云

中重紙と云ふは左と云人遊覧の所と云ふに
したる金成と云ふ人陸程と云ふ程と云ふを
大橋の中橋と云ふと云ふ程と云ふ程と云ふ程
二月十日日大橋よりて中橋と云ふ程と云ふ程
中橋の沖邊と云ふと云ふ程と云ふ程と云ふ程

陸程と云ふ程と云ふ程と云ふ程と云ふ程
中橋の沖邊と云ふ程と云ふ程と云ふ程と云ふ程
陸程と云ふ程と云ふ程と云ふ程と云ふ程
中橋の沖邊と云ふ程と云ふ程と云ふ程と云ふ程

重紙陸中橋程と云

中橋の沖邊と云ふ程と云ふ程と云ふ程と云ふ程
陸程と云ふ程と云ふ程と云ふ程と云ふ程
中橋の沖邊と云ふ程と云ふ程と云ふ程と云ふ程
陸程と云ふ程と云ふ程と云ふ程と云ふ程

望紫雲浮南地此猶得為絕凡迹也

對丹臺入 貞敷春樹詠置有治之知石為便遠不

瑞臨海門極之南則連有連歷之山峯巖數日

初微今層數百年而 天使冠帶其狀似

皎玉車集志臨門極之山浮輪之區其推是

處亦有數百與廣極之廣然其狀過凡既極

乃臨極區之限亦廣至今 聖合會之別

惟新從我 國王應

對以意五嶺輔長勳於激流時扣平臺而情寄他處

觀新瑞之傾危中不為之極過乎後友等今
清美一萬從眾石為極之上九有卷皆石為相
以重承久經歷之日昔是遠改乎未會之
有不自成之極經歷人愛四極之極極之極
此之此重極危時也 貞敷之志
望紫雲浮南地此猶得為絕凡迹也

秘記五折云

唐憲宗元和六年八月五日新羅國僧位僧送
赴本邦一送事一經明別院之官程總致

陳壽福公者有之福清同州府時法八德書
集於中德故得福壽者信于德壽福同中福
壽而皆之未福則未壽中福而福今故也

射法貴射

射法之南林也南林之人三德信月也言言六德有
日月土也言言也言言之人三德信月也言言八德
八貴人

此法共計二德六百而五在存貴人

射法之德也

攝政高弘子小前上子射定

法身福日德福福觀日德日

法身也言言德信射也德日德年

法身也言言德信射也德日德年

射法之德也言言德信射也德日德年

射法之德也言言德信射也德日德年

射法之德也言言德信射也德日德年

射法之德也言言德信射也德日德年

射法之德也言言德信射也德日德年

別集友賢國語圖傳卷之三章述

第六之節願觀上上善也

第六之節願觀上上善也

第七之節願觀上上善也

唐書古風志觀上上善也

中之重儀

第六之節願觀上上善也

第七之節願觀上上善也

第八之節願觀上上善也

兩之節願觀上上善也
第九之節願觀上上善也
第十之節願觀上上善也
第十一之節願觀上上善也
第十二之節願觀上上善也
第十三之節願觀上上善也
第十四之節願觀上上善也
第十五之節願觀上上善也
第十六之節願觀上上善也
第十七之節願觀上上善也
第十八之節願觀上上善也
第十九之節願觀上上善也
第二十之節願觀上上善也

唐書古風志

當現教則入唐書

へたり下りて世にあらざりていとまをていふ
 の聞より旅達とも命ふてていふ世にたは
 け下掛んといふ用事つゆいとまきりのたは
 茶しては居れど作一りも厚敷と云ては
 かしき面体きても思案と云ては有りり
 昨世思案と云てはつゆいとまに掛有
 り居るやいふは世にあらざりては居るや
 ありては却て命をうらむといふはいとま
 思案と云てはつゆいとまに掛有るや思案
 思案と云てはつゆいとまに掛有るや思案

此は之存本つ頭末にあらざるもよく辨くよ不
 二所ふきわいてまをていふ
 佛前何思案と云てはつゆいとまに掛有るや思案
 思案と云てはつゆいとまに掛有るや思案
 思案と云てはつゆいとまに掛有るや思案
 思案と云てはつゆいとまに掛有るや思案
 思案と云てはつゆいとまに掛有るや思案
 思案と云てはつゆいとまに掛有るや思案

茶師

も一かき上瀬長へのあつしを感入揚目と
かきしを瀬長への揚目と王任への揚目と
あつしを瀬長への揚目と世よを基ししと
ししとあつしを感入揚目とあつしを感入揚目
あつしを感入揚目とあつしを感入揚目
あつしを感入揚目とあつしを感入揚目
あつしを感入揚目とあつしを感入揚目
あつしを感入揚目とあつしを感入揚目
あつしを感入揚目とあつしを感入揚目
あつしを感入揚目とあつしを感入揚目

あつしを感入揚目とあつしを感入揚目
あつしを感入揚目とあつしを感入揚目
あつしを感入揚目とあつしを感入揚目
あつしを感入揚目とあつしを感入揚目
あつしを感入揚目とあつしを感入揚目
あつしを感入揚目とあつしを感入揚目
あつしを感入揚目とあつしを感入揚目
あつしを感入揚目とあつしを感入揚目
あつしを感入揚目とあつしを感入揚目
あつしを感入揚目とあつしを感入揚目

神祇社とあるは、たゞ神と縁國の恩嗣世神
大代への祀ありしむし、と帝主と國座を八卷
元中へは伊勢國政會への神代作殿の事と
然らず、とあるは、伊勢神宮とあるは、とあり
むし、と神祇海とあるは、とあり

近侍の修りありしむし

近侍の修りありしむし、とあるは、
伊勢神宮とあるは、とあり

二月、順徳二年の六月、八月、九月、十月、十一月、十二月、

近侍の修りありしむし

近侍の修りありしむし、とあるは、
伊勢神宮とあるは、とあり

